

母親のロマンティック幻想と
子どものメディアコンテンツ接触および嗜好との関係性¹
—母親のメディアコンテンツに関する育児態度に着目して—

麻 生 奈央子*

Effects of mothers' romantic fantasy on frequencies of their
daughters accessing media contents:
Mediated by mothers' attitudes

ASOH Naoko

Abstract

The study investigated the possibility that women's romantic fantasies (RF), extreme romantic ideals associating partners with chivalry and heroism, would predict their attitudes concerning media contents and frequencies of their daughters accessing media contents. 44 married women's implicit RF were assessed using the Implicit Association Test (IAT). Their romantic illusion toward their actual partner (RI) and romantic fantasies toward their ideal partner (RF) were assessed by self-reports. Participants were also assessed their attitudes in selection of media contents for their daughters, as well as frequencies of their daughters accessing the Cinderella stories through mediums such as books and DVD. The results showed mothers' RF significantly and positively predicted frequencies of their daughters accessing the Cinderella story, mediated by mothers' attitudes. Such was not the case for RI, nor implicit RF. In the second part of the study, 130 junior college female students participated in the survey. The results showed their frequencies in accessing the Cinderella stories in their childhood significantly and positively predicted their RF, but not RI. In all, the findings suggested the possibility of the transmission of RF from mothers to daughters through media contents.

Keywords : Romantic fantasy (RF), mothers and daughters, media contents, Cinderella story

問題

本研究は、ロマンティック幻想 (Romantic Fantasy, 麻生・坂元・沼崎, 2015; Rudman & Heppen, 2003, 以下RFと言う) が母親のメディアコンテンツに関する育児態度及び女兒のメディアの嗜好と接触に及ぼす効果の可能性を検討することを目的とする。

RFとは「男性のパートナーをファンタジー物語の王子様やヒーローと連合させる極端なかたちのロマンティックな理想」である (Rudman & Heppen, 2003, P1369, notes 1)。Rudman & Heppen (2003) は、RFは女性自身が自立的に社会経済的地位を獲得しようとする動機づけを弱める可能性があり、ジェンダー間の格差解消にとって目に見えない足枷であると主張した。

RFの測定について、麻生ほか (2015) はRudman & Heppen (2003) に倣って潜在測度で王子様などファン

キーワード：ロマンティック幻想、母親と娘、メディアコンテンツ、シンデレラ物語

* 平成22年度生 人間発達科学専攻

タジー物語を連想する語句とパートナーとの概念的連合を測定し（以下潜在RFと言う）、質問紙で現実のパートナーを王子様のようにだと知覚する傾向（以下顕在RFと言う）を測定した。麻生ほか（2015）はこの2つのRFの測度をRudman & Heppen（2003）に倣って測定したうえで、新たに質問紙で「理想のパートナーは王子様のものであってほしい」と参加者の理想を測定し（以下、理想RFと言う）、3つのRFの関係を検討した。その結果、Rudman & Heppen（2003）の主張する「男性のパートナーをファンタジー物語の王子様やヒーローと連合させる極端なかたちのロマンティックな理想」は「理想のパートナーと王子様の連合」（理想RF）を測定することが妥当であると報告した（麻生ほか、2015）。

麻生・坂元（2015）によれば、理想RFは社会経済的地位の高いパートナーの存在を通じて間接的に自己の価値を高めようとする志向性（以下、間接的勢力志向と言う）を有意に正の方向で説明し、現代のジェンダー間の格差を維持し強化する態度・信念（Barreto & Ellemers, 2015；Tougas, Brown, Beaton, & Joly, 1995）と有意な正の相関を示すなど、ジェンダー間の格差解消にネガティブな影響をもたらす可能性のある重要な変数である。一方、自分自身のパートナーを王子様のようにだと錯覚する顕在RFはMurray, Holmes, & Griffin（1996）の主張するポジティブな錯覚と同義であり、女性の主観的幸福感をポジティブに説明する一方で、自立的な生き方にネガティブな影響を与える可能性は示されなかったと報告した。そこで本研究では、以降より現実のパートナーを王子様と錯覚する顕在RFと、理想の恋人の表象である理想RFとを明確に区別するため、顕在RFをロマンティック・イリュージョン（ロマンティックな錯覚、以下RIと言う）と呼び、理想RFをロマンティック・ファンタジー（ロマンティック幻想、以下RFと言う）と呼ぶこととする。

RFは、「女性は男性に庇護されて幸福になる」というあらすじを持つファンタジー物語と繰り返し接触することで培養されるとRudman & Heppen（2003）は主張した。ファンタジー物語とは「心優しい美しい女性が自らの苦境に耐え忍んだ結果、裕福な王子様に出会って救われ、結婚して幸せになる」という共通したあらすじの物語である。代表的な作品として「シンデレラ物語」がある。ただしRudman & Heppen（2003）はシンデレラ物語との接触がRFを高めるかどうかについては実証的な報告をしていない。

Stangor & Leary（2006）によれば、人は重要他者の信念や価値観を知覚することによって影響を受け、内集団内で信念や価値観を伝達することが知られている。内集団内で信念や価値観の共有についての報告は、親と子どもの外集団に対する偏見やステレオタイプ（たとえば人種に対する偏見など）が有意な相関を示したとの報告がある（O'Bryan, Fishbein, & Ritchey, 2004）。親から子どもに特定の信念や価値観が世代間で伝達される可能性を指摘した研究は少ないが、ある特定の信念、広義の価値観や高次の価値観、とくに保守主義的な価値観については、親（ただし母親とは限定されていない）から子どもに伝達される可能性があるという指摘されている（Stangor & Leary, 2006）。

RFは、保守主義的な価値観及び信念の指標である伝統的性役割観や両価値的性差別主義（Glick & Fiske, 1996）と有意な正の相関を示した（麻生・坂元、2015）。このことから、RFは親から子どもに伝達される可能性が考えられる。そしてその伝達は直接の母親からの影響だけではなく、母親がメディアコンテンツを選択することによる間接的な影響も考えられる。たとえば、母親が幼児期の子どもの育児に使用する絵本やDVDなどのメディアを選択する際、母親の価値観が選択肢に影響することが考えられる。さらに母親の選んだ絵本やDVDなどのメディアと子どもが接触することで、母親の価値観や信念は子どもに伝達される可能性が考えられる。

Asoh & Sakamoto（2014）によれば、RFの文脈に沿ったシンデレラ物語との接触は、ヘレン・ケラー物語との接触に比べ、RFが有意に高いことが示された。潜在RFとRIには有意な効果は示されなかった。この結果から、RFの文脈に沿ったファンタジー物語はRFに影響を及ぼす可能性がある。なお、Asoh & Sakamoto（2014）は未婚の青年期女子を対象とし、シンデレラ物語とヘレン・ケラー物語の接触条件において、RFに及ぼす短期的な影響の可能性はあるか検討する実験研究であった。

本研究は、RFの文脈に沿ったメディアのコンテンツとしてシンデレラ物語を使用し、RFの影響の可能性を調査研究により検討する。まず研究1で成人期の育児中の母親を対象にRFを測定し、母親のRFが女兒を養育する際のメディアコンテンツに関する育児態度を媒介し、子どものメディアコンテンツ接触及び嗜好を有意に予測するか検討することとした。具体的には母親が女兒を養育する際に、読み聞かせやの絵本や視聴させるDVDの物語としてシンデレラ物語を愛好する傾向を測定し、母親のRFが高いほどRFの文脈に沿ったシンデレラ物

語を子どものために好ましいと考えるだろうと予測する。さらに母親のメディアコンテンツに関する育児態度を媒介し、子どもがシンデレラ物語を好んで接触する頻度が高いだろうと予測した。なお本研究ではRFが育児態度と関連する可能性を予測するが、比較のためにRIと潜在RFも測定する。

次に研究2で、青年期女子を対象に子どもの頃にRFの文脈に沿ったファンタジー物語（シンデレラ物語）を選好した傾向を尋ね、メディアとの接触が現在のRFを有意に予測するか検討する。そして、幼児期からシンデレラ物語が好きでよく接触したと回答する女性ほど、青年期時点でのRFが高いだろうと予測する。

以上より、本研究では母親のRFがメディアコンテンツに関する育児態度に影響を及ぼし、さらにその育児態度を媒介して子どものメディアのコンテンツの嗜好と接触傾向に影響を及ぼす可能性を検討する。さらに、子どもの頃に接触したメディアが青年期女子のRFを予測する可能性を検討することで、幼児期に好んで接触したメディアコンテンツを通じてRFが培養される可能性を検討する²。

研究1

研究1では、幼児期前後の子どもを育児中の母親を対象に、RFが母親の育児態度（シンデレラ物語を母親が娘に好ましいと思う態度）及び子どものメディア接触と嗜好を有意に予測するか検討する。さらに母親のRFが子どものメディア接触と嗜好に及ぼす影響を母親の育児態度が媒介する可能性を検討する。そして、以下の仮説を検討する。

仮説① 母親のRFの高さは、母親がシンデレラ物語を娘の育児のために好ましいと思う態度と、子ども（女児）がシンデレラ物語を嗜好し接触する傾向を有意に正の方向で予測するだろう。

仮説② RFと子どものメディアコンテンツの嗜好と接触傾向に及ぼす影響を母親の育児態度が有意に媒介するだろう。

方法

参加者 東京都内の既婚女性に対してスノーボールサンプリング方式で参加を募り、44名が参加した³。参加者の年齢は30代が47.7%、40代が52.3%。結婚年数は4~10年が34.1%、11~15年が65.9%だった。子どもの年齢は $M=7.98$ 歳（ $SD=2.34$ ）だった。

材料

潜在RF IAT (Implicit Association Test, Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) で潜在RFを測定した。コンピュータ画面上の中央に呈示される刺激語がどのカテゴリーに属するかを、d（左手）またはk（右手）を押して回答するよう教示し、反応時間を測定した。カテゴリーは、「ファンタジー」と「夫」、「現実」と「夫以外」の連合を一致試行、「現実」と「夫」、「ファンタジー」と「夫以外」の連合を不一致試行とした。一致と不一致試行の反応時間における平均値の差をRFの潜在指標とした。

「ファンタジー」のカテゴリーにはファンタジーを連想する語句を、「現実」のカテゴリーにはポジティブな特性語を刺激語として使用した⁴。「ファンタジー」の刺激語については、「王子様」、「白馬の王子」、「プリンス」、「ナイト」、「ヒーロー」の5つを刺激語、「お城」を分析に使用しないフィラーの刺激語とした。「現実」の刺激語は、「親切的な」、「陽気な」、「誠実な」、「思慮深い」、「ユーモアがある」で、フィラーは、「信頼できる」であった。「夫」の刺激語は、参加者の夫の実名と普段の呼び名を使用した（例：「太郎さん」など）。フィラーは「主人」であった。「夫以外」の刺激語は、「友達」、「級友」、「いとこ」、「友人」、「隣人」で、フィラーが「弟」であった。

実験参加者が誤答した場合、画面上に赤の「×」が表示され、正答キーを押すと「×」が消えて、次の試行に進んだ。試行間隔は200msだった。

IATの実施にあたっては麻生ほか（2015）に倣った。第1ブロックは「夫」と「夫以外」のカテゴリーで、「太郎さん」や「いとこ」といった刺激語をそれぞれのカテゴリーに分類させた。第2ブロックは「ファンタジー」と「現実」のカテゴリーで「王子様」や「親切的な」などの刺激語をそれぞれのカテゴリーに分類させた。第3ブロックでは「ファンタジー」と「夫」、「現実」と「夫以外」の2対の組み合わせで行う一致試行課題の練習を行い、第4ブロックで、その一致試行課題の本番テストを行った（ただし最初の4試行は分析に使用しないフィラー試行）。第5ブロックでは、第2ブロックとキーの配置を逆にした練習試行を行い、第6ブロックで「夫」と「現実」、

「夫以外」と「ファンタジー」の2対の組み合わせによる不一致課題の練習を行い、最後に第7ブロックで本番を行った（ただし最初の4試行は分析に使用しないフィラー試行）。なお、ブロックの順序が反応時間に影響することを考慮し、一致課題と不一致課題の順序のカウンターバランスをとった。不一致課題が先の場合は、第1、第5～7、第2～4ブロックの順に実施した。

RI 「あなたの夫についてどう思うか」と尋ね、①白馬に乗った王子様のような、②私を守ってくれる、③ごく普通の人だ（逆転項目）、④ヒーローのような、⑤王子様のような存在だの5項目について「非常にそう思う」(6)から「まったくそう思わない」(1)までの6件法で回答を求めた。5項目について信頼性分析した結果、「ごく普通の人」の項目を除くと α 係数は高くなり、また項目間相関も高くなった。1項目を除いた4項目による信頼性係数は高く、 $\alpha = .85$ だった。そこで4項目の平均得点をRIとした ($N=44, M=2.86, SD=1.08$)。得点が高いほどRIが高く、夫と王子様を重ね合わせる傾向が高い。RIの得点は、「夫を王子様のようなと思うか」という問いに対し、1.0～6.0点の中心点である3.5以下の累積度数は35名で、全体の79.5%がそうは思わないという方向に回答した。

RF 具体的な人物に対する態度であるRIと区別するため、「あなたの理想の夫についてお尋ねします」と教示し、RIと同じ5項目について「理想の夫にはどのようなであってほしいか」と尋ねた。5項目について信頼性分析した結果、「ごく普通の人」の項目を除くと α 係数は高くなり、また項目間相関も高くなった。1項目を除いた4項目による信頼性係数は $\alpha = .73$ であった。そこで4項目の平均得点をRFとした ($N=44, M=3.81, SD=0.99$)。得点が高いほど理想の恋人を王子様と連合させる傾向が高い。RFの得点は、「理想として夫を王子様のようなであってほしいと思うか」という問いに対し、1.0～6.0点の中心点である3.5以下の累積度は17名で、全体の38.6%がそうは思わないという方向に回答した。

母親の育児態度 シンデレラ物語を母親が娘に好ましいと思う程度を測定するため「以下の作品のそれぞれについて、お母様がお子さまに選ぶとしたらどの作品が好ましいですか」と尋ね、「とても好ましい」(5)から「まったく好ましくない」(1)までの5件法で回答を求めた。作品は、分析に使用しないフィラー項目を含めて、「ドラえもん」「人魚姫（リトルマーメイド）」「となりのトトロ」「天空の城ラピュタ」「あんぱまん」と「シンデレラ物語」であった。回答にあたり、現在の子どもの年齢にかかわらず子どもが5歳のときを想定して回答するように求めた。また、子どもが複数いる場合は女兒に関して、女兒が複数いる場合は長女について回答するよう教示した。得点が高いほど母親として子どもにシンデレラ物語は好ましいと考える傾向が高かった ($N=30, M=3.77, SD=0.86$)。

子どもの嗜好接触傾向（子どもがシンデレラ物語を嗜好し接触する傾向） 子どもがシンデレラ物語を好きだと思い接触する程度を測定するため、2つの質問項目に回答を求めた。2つの項目の合計得点の平均値をもとめ、シンデレラ物語を子どもが嗜好し接触する傾向（以下、「子どもの嗜好接触傾向」と言う）として数値化した ($N=30, M=3.08, SD=1.27$)。信頼性係数は $\alpha = .77$ であった。2項目の内容は以下の通りであった。回答にあたり提示した作品は母親の育児態度で使用した6作品と同じであった。

①シンデレラ物語との接触 第1項目は教示で「お子様が5歳前後のころ、お子さんがとくに気に入って選んでいたアニメやビデオはどんなものがありましたか」と尋ねた。そして、「とてもよく見ていた」(5)から「まったく見なかった」(1)まで5件法で回答させた。得点が高いほど子どもが「シンデレラ物語」に接触した傾向が高い。

②シンデレラ物語を子どもが好む程度 第2項目は教示で「お子様が5歳前後のころ、お子様が好きだった物語にはどんなものがありましたか」と尋ねた。「物語や作品はテレビやビデオ、絵本の形式にこだわらずにお答えください」として「とても好んでいた」(5)から「まったく好まなかった」(1)まで5件法で回答を求めた。得点が高いほど子どもが「シンデレラ物語」を好む傾向が高い。

手続き 参加者に参加は自由であること、謝礼として1,500円を支払うこと、答えたくない質問には無理に回答しなくて問題ないことを説明し、「仕事や結婚に関する調査」と教示した。回答時間は説明を含めて約1時間程度かかると教示した。参加に同意した参加者に調査のために必要であると説明して参加者の夫の名前と普段の生活での呼び名を尋ね、参加者にPCの画面が見えない位置でIATのプログラミングに入力した。参加者は潜在RFを測定するためIATに回答し、RF及びRIを測定するため質問紙に回答した。最後に子どもの嗜好接触傾向

と母親の育児態度の質問紙に回答し、ディブリーフィングを受け終了した。RFの測定にあたり、潜在RFを先に測定するIAT先群(24名)と、RFとRIを先に測定する質問紙先群(20名)をランダムに決定した⁵。ディブリーフィングの際、本調査の真の目的に気づいたかどうかを参加者に尋ねたところ、本調査の真の目的を正しく推測した参加者はいなかった。

結果と考察

尺度の得点化 分析にあたり、欠損値のある参加者については分析から除外したため、尺度ごとに分析対象者の人数が異なる⁶。分析対象者の数は尺度ごとに記載した。

潜在RF 分析にあたり、データのはずれ値を除外して(>3000ms, <300ms)対数変換し、不一致試行と一致試行の平均値の差を潜在RFの指標とした($N=42$, $M=0.06$, $SD=0.11$)。反応時間には、正反応に加えて誤反応も分析に加え、誤反応が40試行中12試行を超えた場合、分析から除外した(Greenwald et al., 1998)。潜在RFでは夫とファンタジーを連合させる程度が強いほど数値が高くなる。一致試行と不一致試行の反応時間を比較すると、一致試行の方が反応時間が有意に短かった($t(41)=3.52$, $p<.01$)。夫と現実を連合させる試行よりも、夫とファンタジーを連合させる試行の方が、反応時間がより短いという結果であった。

変数間相関分析 各変数間の相関分析を行った。その結果、RFは母親の育児態度及び子どもの嗜好接触傾向と有意な相関を示した(Table 1)。

Table 1 変数間相関分析結果

	育児態度	子どもの嗜好接触傾向
RF	.56**	.42*
潜在RF	.32	.42*
RI	.21	.29

注1) $p^{**}<.01$, $p^{*}<.05$.

注2) 育児態度：シンデレラ物語を母親が娘に好ましいと思う態度

仮説の検証 仮説①を検討するため、被説明変数を母親の育児態度及び子どもの嗜好接触傾向とし、母親のRFとRI及び潜在RFが予測する効果を重回帰分析(ステップワイズ法)で検討した。分析の結果、仮説①を支持する方向でRFは母親の育児態度を有意に正の方向で予測し($F(1, 26)=13.25$, $p=.001$, $\beta=.58$, $p=.001$; Table 2, 左)、また子どもの嗜好接触傾向を有意に正の方向で予測した($F(1, 26)=6.83$, $p<.05$, $\beta=.46$, $p=.015$; Table 2, 右)。潜在RFとRIは有意な予測効果を示さなかった。

Table 2 RFと育児態度(左)、RFと子どもの嗜好接触傾向(右)の重回帰分析結果

	β	t	F		β	t	F
RF	.58	3.64**	13.25**	RF	.46	2.62*	6.83*
潜在RF	.21	1.22		潜在RF	.16	.81	
RI	-.15	-.09		RI	.17	.88	

注) $p^{**}<.01$; $p^{*}<.05$

次に仮説②を検討するため、パス解析を行った。分析の結果、RFが子どものシンデレラ物語嗜好接触傾向に及ぼす効果を母親の育児態度が媒介する効果が有意であった(Fig. 1)。モデルは $\chi^2=.22(n.s.)$, GFI=1.00, AGFI=.97, RMSEA=.00, AIC=10.22で、適合度は十分であると判断した。よって仮説②は支持されたといえる。ただし育児態度は1項目によって測定されていることから、指標として信頼性が検証されていない。したがって今後は育児態度について複数の項目で測定して検討することが必要であろう。

以上より、母親のRFが高いほど母として女兒の育児に使用するうえでシンデレラ物語は好ましい作品であると考えられる傾向が高く、その母親の育児態度を媒介して女兒がシンデレラ物語を好み、DVDや絵本などのメディアでシンデレラ物語に接触する傾向に正の方向で有意に予測する効果を示す結果であった。よって、仮説②は支持された。

また、RIについては有意な予測効果は示さなかった。現実生活の夫を王子様のようにだと意識的に表明する態

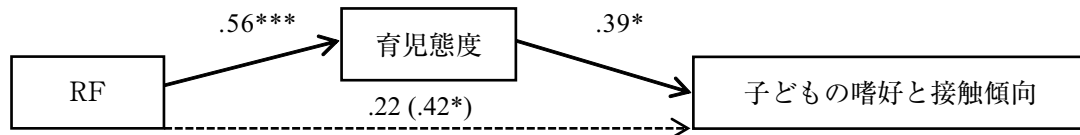


Fig. 1. パス解析結果

注1) 数値は標準化係数, $p^{***} < .001$; $p^{**} < .01$; $p^* < .05$; () 内は媒介前標準化係数。

注2) 実線は有意、破線は有意でないパスを示す。

度は、母親の育児態度と女兒がシンデレラ物語を嗜好し接触する傾向を有意に予測しないという結果であった。潜在RFも有意な予測効果は示さなかった。麻生ほか (2015) は被説明変数に有意な効果を及ぼすRFとは、RIと潜在RFではなく、理想のパートナーの表象を質問紙で測定したRF (麻生ほか (2015) では理想RFと呼んだ) であると報告した。本研究の結果は、麻生ほか (2015) と同様に、母親の育児態度に影響を及ぼす可能性のある変数は潜在RFやRIではなく、理想のパートナーの表象であるRFであることを示したといえる。

研究 2

研究1の結果、母親のRFの高さは、メディアコンテンツに関する育児態度を媒介し、女兒のメディアコンテンツの嗜好と接触に影響を及ぼす可能性が示された。この結果から母親のRFは、メディアとの接触を媒介して子どもに伝達される可能性がある。ただし、実際にシンデレラ物語と多く接触するほどRFが高いかどうかは確認されていない。そこで研究2では、青年期女子のRFと子どもの頃からのメディアとの接触の傾向を測定し、2つの変数間に有意な相関が示されるかを検討する。そして、以下の仮説を検討する。

仮説 子どものころにシンデレラ物語を選好したと回答する傾向は、青年期女子のRFの高さを有意に予測するだろう。

なお研究2では、RFのほかに確認のためにRIも測定する。

方法

参加者 首都圏の短期大学生130人 ($M=20.00$ 歳, $SD=1.01$)。既婚の参加者 ($n=1$) と、回答に際して正直に回答しなかったと答えた参加者 ($n=7$) を分析から除外したため、分析対象者は122名であった ($M=20.01$ 歳, $SD=1.04$)。また、分析に当たり欠損値のある参加者を分析から除外したため、変数ごとに分析対象者の人数が異なる。以下に、変数ごとに分析対象者の人数を記述する。

材料

RI Rudman & Heppen (2003) に倣って麻生ほか (2015) が作成した顕在RF尺度を使用した。現在交際中の恋人についてどう思うかと尋ね、5項目について「非常にそう思う」(6)から「まったくそう思わない」(1)までの6件法で回答させた。5項目は①王子様ようだ、②私を守ってくれる、③ごく普通の人 (逆転項目)、④ヒーローのようだ、⑤白馬の王子様のようにであった。得点が高いほどRIが高く、交際中の恋人と王子様を重ね合わせる傾向が高い ($N=114$, $M=2.46$, $SD=0.96$)。

RF 具体的な人物に対する態度であるRIと区別するため、「あなたの理想の恋人についてお尋ねします」と教示し、RIと同じ5項目について「理想の恋人にはどのようなであってほしいか」と尋ねた。得点が高いほどRFが高く、理想の恋人と王子様の連合が高い ($N=121$, $M=2.95$, $SD=1.01$)。

シンデレラ物語選好傾向 シンデレラ物語との接触や選好の態度を測定するため、2つの項目に回答を求めた。2項目の平均値を「シンデレラ物語選好傾向」の指標とした ($\alpha=.88$)。得点が高いほど、選好傾向が高い ($N=117$, $M=2.90$, $SD=1.37$)。2つの項目は以下の通りであった。なお、教示で子どもの頃は概ね5歳前後を想像するよう教示した。

①子どもの頃のシンデレラ物語との接触 第1項目は「あなたが子どもの頃に見ていた作品についてお聞きします。思い出せる範囲で教えてください。あなたが子どもの頃に見たビデオやアニメ、または読んだ物語はどんなも

のありましたか」と尋ねた。(5)「とてもよく見ていた」から(1)「まったく見なかった」まで、5件法で回答させた。得点が高いほど子どもの頃に「シンデレラ物語」に接触した傾向が高い。作品は分析に使用しないフィラー項目を含め、「どらえもん」「あんぱんまん」「千と千尋の神隠し」「プリキュア」「魔女の宅急便」と、「シンデレラ物語」であった。

②子どもの頃にシンデレラ物語を好んだ傾向 第2項目の教示では「あなたが子どもの頃、好きだった作品や物語はどんなものがありましたか」と尋ねた。「作品は、テレビやビデオ、絵本など、とくにその形式にはこだわらず、お答え下さい」として、(5)「とても好きだった」から(1)「まったく好きではなかった」まで5件法で回答を求めた。得点が高いほど、子どもの頃に「シンデレラ物語」を好んだ傾向が高い。作品は第1項目と同じであった。

手続き 心理学の講義の一部を利用して調査を実施した。参加者に参加は自由であること、途中で気分が悪くなどした場合はいつでも途中でやめることができることを説明し、調査を開始した。参加者は、質問紙でRF及びRIとシンデレラ物語選好傾向の質問紙に回答し、ディブリーフィングを受けた後、調査を終了した。

結果と考察

変数間相関分析 各変数間の相関分析を行った。その結果、RFは子どもの頃のシンデレラ物語選好傾向と有意な弱い相関を示したが、RIは有意な相関を示さなかった (Table 3)。またRFとRIは有意な正の相関を示した (Table 3)。

仮説の検証 子どもの頃のシンデレラ物語選好傾向がRFの高さを予測する可能性を検討するため、被説明変数をシンデレラ物語選好傾向とし、RFを予測する効果を回帰分析で検討した (Table 4)。その結果、仮説を支持する方向で、回答者の子どもの頃のシンデレラ物語選好傾向は、有意に正の方向で回答者の現在のRFを予測する効果が示された ($F(1, 114) = 6.26, p = .01$)。

Table 3 変数間相関分析結果

	RI	シンデレラ
RF	.56**	.23*
RI		.11

Table 4 重回帰分析結果

	<i>t</i>	β	<i>F</i>
RF	2.50	.23*	6.26*
RI	1.02	.10	1.04

注) シンデレラ：シンデレラ物語選好傾向； $p^{**} < .01, p^* < .05$.

以上の結果より、子どもの頃にシンデレラ物語を好きで、よく見たと回答する傾向は、現在のRFの高さを有意に正の方向で予測する効果を示した。この結果から、子どもの頃にRFの文脈に沿ったファンタジー物語との接触傾向が高いほど、青年期女子のRFが高いことが示された。よって、仮説は支持されたと言える。また、子どもの頃のシンデレラ物語選好傾向がRIを予測する効果については、有意な予測効果は示されなかった ($F(1, 109) = 1.04, n.s.$)。このことから、メディアとの接触は現実のパートナーに対する評価や知覚には影響を及ぼさないことが示された。

総合考察

研究1では、5歳前後の子どもを持つ育児中の成人期の既婚女性を対象に調査を行った。分析の結果、仮説の通り、母親のRFの高さは自分自身の子どもを養育する際にメディアのコンテンツとしてシンデレラ物語を好ましいと考える傾向を有意に予測した。そして、その母親の態度を媒介して自分の子どもはシンデレラ物語を好んでよく見ると回答する傾向を有意に予測した。この結果から、母親のRFは育児に使用するメディアの選択に影響を及ぼし、RFの高い母親の子ども(女兒)ほど、RFの文脈に沿ったファンタジー物語と接触する頻度が高い可能性が示された。

Asoh & Sakamoto (2014) では、シンデレラ物語に接触すると、ヘレン・ケラー物語に接触するのに比べ、RFが高いことが示された。Asoh & Sakamoto (2014) は実験的に一時的に物語と接触させ、RFに影響を及ぼすか検討したものであった。本研究では研究2の結果、子どもの頃からシンデレラ物語を好きでよく見たと回答

した女子学生ほど、青年期段階のRFが高いことが示された。この結果は、実験的な短期的因果関係を推定した研究報告と一致するものといえる。RFがメディアとの接触の影響を受け得る可能性について短期的な影響の可能性に加え、本研究の結果、長期的な影響が示唆されたといえよう。

以上の結果をまとめると、母親のRFが高いほど、その母親は女兒の養育の際にRFの文脈に沿ったファンタジー物語を好ましいと考え、その態度を媒介して女兒はRFの文脈に沿ったファンタジー物語を好み接触することが示された。さらに子どもの頃にそうしたファンタジー物語を好んでよく見たと回答した青年期女子のRFは高いことが示された。

本研究の結果、母親のRFは女兒の育児に使うメディアコンテンツに対する態度を媒介して子どものメディアに関する嗜好と接触に影響を及ぼし、さらにシンデレラ物語などRFの文脈と一致するメディアのコンテンツを介して子どもに伝達される可能性が示されたといえる。

なお、本研究では研究1、研究2ともに、ファンタジーと恋人の概念的連合である潜在RFと、王子様と自分の恋人の連合であるRIには有意な予測効果は示されなかった。Asoh & Sakamoto (2014)の研究でも、物語との接触は、RF（理想の恋人は王子様のものであってほしいとする幻想）には影響を及ぼすことが示されたが、RI（自分の恋人を王子様と錯覚する傾向）と潜在RFには、物語との接触は影響を示さなかった。本研究の結果は先行研究の報告と一致しており、RFがメディアとの接触によって影響を受け得る可能性が示されたといえる。

ある特定の信念や価値観が親から子どもに伝達される可能性を検討した研究はこれまでに少なく、研究知見が蓄積されていない (Stangor & Leary, 2006)。また親の価値観や信念がメディアを媒介して子どもに伝達される可能性を検討した研究も著者の知るところでは研究知見が十分蓄積されていない。

RFとは、地位や権力などに優れた人物が理想の恋人であるとする恋愛観であり、価値観である。本研究の結果は、母親の価値観が育児のために選ぶメディアに影響し、そのメディアを媒介して子どもに伝達される可能性を示唆するものであり、意義がある。

ただし本研究は、2つの異なるコーホートで別々の参加者を対象とした相関研究であり、同じ参加者を対象とした縦断研究ではない。そのため、本研究の結果からは世代間でRFが伝達され共有されるとまでは結論づけることができない。今後は、親子間でRFが共有されるかについて検討する必要がある。そのためには母親のRFと、その母親の子ども（女兒）のメディア接触傾向のペアデータを測定して比較検討し、さらに母と娘のRFを調べて有意な相関が示されるか検討することが必要となろう。

これまでの研究で、RFは女性の幸福感やwell-beingに負の予測効果を示すなど不適応の指標であることが示された (麻生ほか, 2015; 麻生・坂元, 2014)。さらにRFは、両価値的性差別主義 (Glick, & Fiske, 1996) や新性差別主義 (Tougas, et al., 1995) など社会的なジェンダー間の格差を維持し拡張しようとする態度と関連し、重要な変数であると報告されている (麻生・坂元, 2015)。したがって、今後RFが母親から娘に世代間で伝達されたり共有されたりする可能性を検討することは意義があろう。

本研究の結果、メディアがRFの伝達を媒介する可能性が示され、かつ、RFが親から子どもに世代間伝達される可能性の端緒が示されたといえる。

註

1. 本研究の一部のデータは、日本社会心理学会第51回大会 (2010) にて発表した。本研究の執筆にあたり、ご指導いただきましたお茶の水女子大学の坂元章先生に深く感謝を申し上げます。
2. 研究2では、研究1の結果を受けて潜在RFを測定せず、顕在測定のみを用いて検討した。
3. 研究1は参加者をスノーボールサンプリング方式で募集した。そのため本研究の結果には一般化可能性において制限がある。
4. IATの刺激語は、麻生ほか (2015) に倣った。麻生ほか (2015) は予備調査を実施し、研究の目的を知らない大学院生にファンタジーを連想させる男性を表す言葉を自由記述で書くよう求め、記述の多い順に刺激語を採用した。
5. IAT先群と質問紙先群の2つの群間で、RIについてのみ、質問紙先群の方が高いという方向で、有意な差が見られた ($t(40)=2.43, p < .05$, IAT先群 $M=1.91, SD=.92$, 質問紙先群 $M=2.74, SD=1.27$)。この順序の効果が仮説に影響を及ぼすか検討したところ、結果に影響しないことが確認された。そのため、以降の分析は、順序による効果を要因に含めないものを報告する。
6. IATが正常に遂行されなかった2名を分析から除外した。母親の育児態度と子どもの嗜好接触傾向については、育児中の子どもが男児

のみであると回答した参加者と欠損値のある参加者を分析から除外した。そのため、 $N=30$ であった。

引用文献

- Asoh, N. & Sakamoto, A. (2014). Cinderella effects on women's romantic fantasy and their interests to find benefactor. Annual meeting of society for personality and social psychology, Feb.2014, Austin, TX, USA.
- Barreto, M., & Ellemers, N. (2015). Detecting and Experiencing Prejudice: New answers to old questions. In J.M. Olson & M.P. Zanna (Eds.), *Advances in experimental social psychology*, (vol 52). San Diego, CA: Academic Press. pp.139-219.
- 麻生奈央子・坂元章 (2014). ロマンティック幻想の潜在測度と理想の関係 日本社会心理学会第55回大会発表論文集、2014-A-0438. 北海道大学.
- 麻生奈央子・坂元章 (2015). 新・性差別主義とロマンティック幻想の相関 日本社会心理学会 第56回大会発表論文集、P313-02 東京女子大学.
- 麻生奈央子・坂元章・沼崎誠 (2015). ロマンティック幻想の測定—潜在測度, 顕在測度の乖離と理想測度—. *パーソナリティ研究*, **23**, 156-170.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The ambivalent sexism inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 491-512.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- O'Bryan, M., Fishbein, H.D., & Ritchey, P.N. (2004) Intergenerational transmission of prejudice, sex role stereotyping, and intolerance (Review). *Adolescence*, **39**, 407-426.
- Rudman, L. A., & Heppen, J. B. (2003). Implicit romantic fantasies and women's interest in personal power: A glass slipper effect? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 1357-1370.
- Stangor, C., & Leary, S. (2006). Intergroup beliefs: Investigations from the social side. In M.P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, (vol 38). San Diego, CA: Academic Press. pp 243-281.
- Tougas, F., Brown, R., Beaton, A.M., & Joly, S. (1995). Neosexism: Plus ça change, plus c'est pareil. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 842-849.